

国文学研究資料館蔵「たかだちおち」解題・翻刻

桑 汐 里

要 旨

国文学研究資料館蔵「た〔かだ〕ちおち」は、源義経の最期を描いた幸若舞曲『高館』『含状』を一続きとした特異な写本で、同様の形式をもつ写本としては、『高館』の最古写本である大方家本が知られるのみであった。『高館』にあたる前半部の本文系統は大頭系を中心としながらも、一部に独自本文がみられる。また後半の『含状』にあたる本文系統は、文禄本の系統に近いが、結末に近い箇所にとまった独自本文がみられる。幸若舞曲の演目成立を解明する貴重な一本と考えられるため、ここに翻刻紹介する次第である。

【解題】

国文学研究資料館蔵『た「かだ」ちおち』（以下、「国文研本」と称す）は、幸若舞曲『高館』『含状』にあたる内容を、内題を付さずにひと続きに記し、一冊にした写本である。当初から『高館』『含状』が一体となった形で伝えられてきたとみられる。

『高館』は、奥州平泉の高館御所に逃げのびた義経主従が、頼朝の差し向けた追討軍に攻め込まれ落城する物語で、鈴木亀井兄弟の再会、熊野権現に由来する鈴木家重代の腹巻のこと、鈴木兄弟の奮戦と弁慶の立ち往生など、主に九人の忠臣のエピソードを軸に展開する。『高館』に次ぐ『含状』では、弁慶の死を知った義経が兼房に命じて北の方と二人の若君を殺害させ、自身も切腹し高館御所ごと炎に飲み込まれるという壮絶な最期が描かれる。曲名の「含状」は、焼け跡から取り出された義経の首がくわえていた巻物に、梶原の讒言によって死に追いやられたことへの嘆きがつづられていたことに拠る。

現存する『高館』のテキストは、未見のものも含めて四〇点以上とかなりの本数が確認できる。これに対し『含状』は、国文研本と、近年、小林健二氏によって紹介された国文学研究資料館蔵の梵舜旧蔵写本も含め八本がしられるのみで、他の幸若舞曲にくらべて極めて伝本が少ない。

この点について、諸本中、最古写本である大方家蔵『高館』（天正十四年（一五八六）以前成立、以下「大方家本」と称す）を紹介した小林健二氏は、大方家本が『高館』『含状』をひとまとまりとして識語に「高館之本」と記していること、その詞章に口語りの面影がみられること、『含状』諸本の中でも成立の早い文禄本系統に近い本文を有す

ること、『含状』には上演記録がなく初出は文禄二年書写の文禄本まで待たなければならぬこと等を指摘し、「原「高館」は義経の最期と、その後日譚である「含状」を一体としていた可能性が極めて強いと言える」と結論付けている。⁽¹⁾加えて、『高館』『含状』が一体となった大方家本の形こそ、原『高館』に近く、詞章が固定化される以前の姿を留めたテキストであると指摘した。

このことと併せ考えるべきは、先学によつて指摘されている幸若舞曲の判官物の連続性である。⁽²⁾とりわけ義経の没落から死を描く『富樫』『笈搜』『八島』『和泉が城』『清重』『高館』『含状』は統一された設定を持つなど、作品世界を共有しており、これらの演目の母体に義経を主人公とした長編の物語が存在したのではないかと指摘されている。実際、新井白石（二六五七―一七二五）が水戸藩士・安積澹泊^{あふたんぱく}に宛てた書簡には『和泉が城』『高館』『含状』が一体となった「高館草紙」なる書物についての言及があり、幸若舞曲『高館』の他に、『高館』『含状』あるいはそれ以外のテキストを合併した内容のテキストが流布していたことをうかがわせる。ここに紹介する国文研本もまた、そうした判官物の連続性を念頭において編まれた『高館』の一伝本であり、義経の最期をめぐる舞曲の原態に迫る貴重な一本となる。ゆえに、当該本の諸本における位置づけを明らかにし、ここに紹介する次第である。

まずは簡略に国文研本の書誌を記す。

〈所蔵者整理書名〉 た□□ちおち

〈整理番号〉 タ7170

〈外題〉 左肩短冊題箋に「た□□ちおち」と墨書。□箇所は汚れのため判読不可。

〈内題〉 なし。

〈書写年次〉江戸時代前期。

〈表紙〉柿渋色地に菊菱形型押紋様。

〈見返〉本文共紙。

〈料紙〉楮紙。

〈装訂〉袋綴。

〈数量〉一冊。

〈寸法〉縦二四・六糎×横一六・八糎

〈行数〉七行。

〈本文字高〉一九・六糎。

〈紙数〉六一丁。

〈挿絵〉なし。

〈本文〉漢字平仮名交じり。

〈曲節〉なし。

〈蔵書印〉「横」（墨単郭円形、一丁オ・五八丁ウ）。

〈奥書〉「奥州仙台志田郡／千石村／佐藤勘六／持用也」（五九丁ウ）

「奥州仙台／志田郡千石村／佐藤勘六／持用也」（六一丁オ）

伝来の詳細は明らかでないが、五九丁ウ～六一丁オに、奥州仙台志田郡千石村（現在の宮城県大崎市松山千石）の

佐藤勘六なる人物が所持していたことが記される。これと同じ筆跡で明治十二年（一八七九）から十三年（一八八〇）にかけての金銭の記録や計算式が記されているが、本文とは別筆であるため、成立年を示すとはいえない。

次に、本文の特徴について述べておこう。現存する伝本は以下の通りである。《》には、閲覧媒体を記した。

高館 ★「含状」を合写するもの。

幸若舞曲正本

越前幸若系

小八郎家系

甲 毛利家本 元和三年（一六一七）写 《幸若舞曲集・序説》／『毛利家本 舞の本』

内閣文庫本 江戸初期写 《古典文庫 舞の本》上／『幸若舞曲研究』八

打波本家（越前）家 江戸中期写 《朝日町誌 資料編一》

伊藤本 寛文三年（一六六三）写

乙 大道寺家本 江戸初期写

蓬左文庫蔵本（大道寺家本の謄写本）

天理図書館藤井本 江戸初期写

天理図書館藤井氏一本（松村本） 江戸中期写

弥次郎家系

慶応大学伝小八郎本 江戸初期写 《東洋文庫 幸若舞》二

大頭系

文禄本系

甲 文禄本（上山宗久本） 文禄二年（一五九三）写《天理図書館善本叢書 舞の本》

十行古活字版（名古屋市立図書館河村本目録による。戦災焼失）

十行古活字本断簡か 《川瀬一馬『増補古活字版之研究』》

寛永丹緑本《吉田小五郎『TANROKUBON』》

寛永整版本（霞亭文庫）《寛永版 舞の本》三弥井書店／『新日本古典文学大系 舞の本』

丙 関大平川家本 江戸後期写《幸若舞曲研究》一《》

大江本二種（嘉永元年〈一八四八〉写本、明治四十五年〈一九一二〉写本）《大江の幸若舞》／『幸若舞

曲研究』三《》

左兵衛本系

天理図書館大頭左兵衛本 室町時代後期写《幸若舞曲集・本文》

京大本（杉原本） 寛永四年（一六二七）写《幸若舞曲研究》三《》

その他

内閣文庫別本「たかたち こしこへ」写一冊（『腰越』と合写）

★大方家本 天正十四年（一五八六）以前写《幸若舞曲研究》四《》

東京大学国文学研究室蔵本 写一帖 江戸前期写『高館』『合状』で二番一冊 [https://kotenseki.nijl.](https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100167437/viewer/1)

[ac.jp/biblio/100167437/viewer/1](https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100167437/viewer/1)

★国文学研究資料館蔵本 *翻刻底本

多和文庫蔵「高館物語」写一冊 版本の転写本《国文研マイクロ271-122-4》

絵巻・絵本

舞の本刊行以前

大東急記念文庫蔵奈良絵本三冊 室町末期写

今治市河野美術館蔵絵本（絵欠） 室町末期写《国文研マイクロ73-510-2》

滋賀県西福寺蔵横型絵本二冊 江戸初期写《『たかたち』文栄堂》

舞の本刊行以後

岩瀬文庫蔵横型絵本三冊 寛文頃

井田等氏蔵横型絵本三冊 江戸前期《工藤早弓『奈良絵本 上』》

チェスタービーティライブラリー蔵絵巻一軸 寛文頃

海の見える杜美術館蔵絵本大本二冊 寛文延宝頃

その他絵画資料

東京国立博物館蔵 狩野晴川院模写白描絵巻 一軸 天保二年（一八三一）

未見

京都大学附属図書館蔵「高たち」写一冊 正保三年（一六四六） 後見返し「正保三年／新川孫七郎」

東京大学附属図書館蔵南葵文庫「たかたち」写一冊 江戸中期写 〔南葵文庫蔵書目録〕

早稲田大学図書館蔵本 明治写

無窮会神習文庫蔵本 版本の転写本 〔神習舍玉簾目録〕

国立国会図書館蔵「高館草紙」写一冊 版本の転写本

宮内庁書陵部蔵「高館草紙」写二卷一冊 江戸末期

彰考館文庫旧蔵 安永八年伊勢貞丈補写一冊

正宗文庫蔵「高館草子」写一冊 〔江戸前期〕写 一冊

根津美術館蔵 絵巻

弘文荘11 絵本二冊

弘文荘20 絵本元禄頃三冊

三都古典連合会 絵本三冊

思文閣155 絵本 寛文延宝 三軸

個人蔵 絵本横本三冊

古浄瑠璃

松廼舍文庫蔵（戦災焼失）「たかたち五段」一冊、寛永二年（一六二五）刊、寺町妙満寺之前勝兵衛板 〔古浄瑠璃正本集』一〕

〔含状〕 ★「高館」を合写するもの。

- ①大頭一本 江戸初期写『幸若舞曲集・本文』／『幸若舞曲研究』八
- ②文禄本 文禄二年（一五九三）写『天理図書館善本叢書 舞の本』
- ③大阪大谷大学蔵本（中野莊次氏旧蔵） 江戸前期写『幸若舞曲研究』一
- ④東京大学国文学研究室蔵本 写一帖 江戸前期写『高館』『含状』で二番一冊 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100167437/viewer/1>
- ⑤慶応大学伝小八郎本（初葉一枚のみ存） 江戸初期写『幸若小八郎正本 幸若舞曲集 下』
- ⑥★大方家本の「含状」該当箇所『幸若舞曲研究』四
- ⑦国文学研究資料館蔵本 慶長十八年（一六一三）書写、梵舜旧蔵写本
- ⑧★国文学研究資料館蔵本

『高館』の校合に際しては、幸若舞曲正本のみを対象とし、傍線部——の代表的な系統のテキストを用いた。『高館』には正本以外にも、多くの絵巻・絵本、流派不明な本文のみの写本も多数伝わるが、今回は校合の対象としなかった。また『高館』の幸若舞曲本文については、すでに池田広司氏、小林健二氏によって主要伝本の校合がなされ、〔幸若系、大頭系と一往大きく分けられるものの、本文の大きな改訂はなく、口頭伝承によると思われる説教節や浄瑠璃十二段の異同ほど大きくはなく、文字伝承による異同として扱える〕（池田論文）との見解が導き出されている。その後紹介された大方家本は、詞章に語り物の面影を留めた異同の多いテキストで、厳密な校合は難しい一本であるが、最古写本であるため、可能な限り比較の対象とした。また、古浄瑠璃の『たかだち 五段』は、『高館』にあたる内容を

終えたのち、『含状』の内容である義経の最期をも添えており、大方家本、国文研本とともに『高館』『含状』を一体化させたテキストであることから、考察の対象に加えた。

諸本を比較した結果、国文研本の本文は大頭系に近いが、他本にはない独自本文が数か所みられる。中でも注目すべきは、『高館』の終曲部分にあたる衣川にて立往生を遂げた弁慶の生死を確かめるべく、奥方の武将であった「ぬまだて（のまたて）」が弓の筈でつついて確かめる場面の本文である。内閣文庫本、慶応大学伝小八郎本、文禄本、寛永整版本、関大平川家本、東京大学国文学研究室蔵本は、微細な異同こそあれ、比較的共通した本文であるのに対し、国文研本は幸若舞曲正本に比べて簡略な本文で、短い独自本文も確認できる。また、諸本が「ぬまだて（のまたて）」とする名を、国文研本のみ「ぬまさき」とするなどの特徴がある。

次に、『含状』の本文系統について述べておこう。『含状』の諸本は底本も含め①⑧が知られており、これらは村上孝氏、小林健二氏によって、②③④⑥⑦の系統と、①⑤の系統とに分けられている。⁽⁵⁾①⑤の系統は『含状』の冒頭に、高館城の搦め手を死守していた鷲尾ら五人の活躍を増文していることから、村上氏はこの増文を「高館」と「含状」の基幹プロットとの間隙を埋め、義経物語としての完全化をはかろうとする作業」とみなした。さらに、他本で二人となっている若君を一人にしている点も「高館」にあわせて一人にし「たと解せることから、「大頭一本の形が後出であろうか」とする。最古写本である⑥の大方家本が②③④に近い冒頭を有することも加わって、②③④⑥⑦の系統が先で、①⑤の系統が後に成立した、とするのが従来の見方である。ここに国文研本を位置づけると、搦め手の人々の活躍は記されておらず、若君も二人登場するため、②の文禄本をはじめとする系統に属するといえる。しかし、②の系統と比較すると、かなりの省略があり、北の方の最期の美しさ、それを手になかなければならぬ兼房のくどき言、梶原を挽首になしたこと等、このほか微細な表現が失われている。ともすれば、略本であるかのようにみえるが、

首実検を行う頼朝の言動に、梶原への恨み言をのべるといふまとまった独自本文がみえる。

これらの独自本文は、幸若舞曲正本のいずれにも確認できないものである。国文研本がいかなる経緯でこうした独自本文を持つに至ったのかについては、今回校合することのできなかった絵巻、絵本、そのほか多数の写本群を含めて改めて検討したい。

【翻刻】

〈凡例〉

- 一、本文は原文通りを原則とし、当て字も原本通り表記した。字体は正字のままとした。
- 一、仮名遣いは、底本のままとした。
- 一、反復記号「く」「ゝ」「ゝ」「々」はそのまま表記したが、「く」「ゝ」が漢字に用いられている場合のみ、「々」に改めた。
- 一、明らかな誤記・誤写とみられる箇所には（ママ）を付した。
- 一、判読が不明な箇所については□で表記した。
- 一、各丁の移り変わりは（1才）（1ウ）で表記し、本文はすべて追い込みとした。
- 一、補入の箇所は、本文中に（ ）に入れて示した。
- 一、ミセケチや訂正の箇所は、できるだけ原本通り表記した。

〈本文〉

さる間よりもかちわらへいさうかけときをまちかくめしての御ちやうにはいかにかちはらうけ給れよしつねかむほ
 んにおぬてうたかふ所さらになしいそきよしつねをたひししてよををさめんとの御ちやうなりかちわらうけ給と申て
 なかさきとのに三百よきをたまはつていそきおくにもつきしかはさいそくまわしせひそろいやすひらかたち（1才）
 によりきしてゐるひの太郎筆とりにてはやちやくとうをつくるそうりやうなれはにしきとつきにやすひらひつめの五郎
 たまつくりぬまくら殿御きやうたいそのほかの人々にけんそのや七木はらのけんこくもゐの太郎あつせのきやうふひ
 やうとうをさきとしてみやうじのさふらい七ひやくよきそのほかつかふつわものとも七千三（1ウ）百よきはやちや
 くとふをつくるそも／＼ころはいつなるらんふんし五年うるう四月廿七日今日は日からよからす明日たつのこくにむ
 かふへしとさため大田山くちなかむらにちんとつてむかへたりさてたかたち殿にはかたきむかふよしをきこしめしさ
 くらひたちをめさるゝによひまてはさふらひ八人大将ともに九人ときこへしかあくる（2才）日のかつせんに十人の
 やうをくわしくたつぬるにきしうくまのゝちう人にすゝきの三郎しけいゑにてもゝあわれをとゝめたりある夜すゝ
 き女ほうにかたるやうなにかし思ふ事ありて此あかつきおうしうにくたるへし心のまゝにくたりをほせ君もめてたふ
 ましまさはみやうねんのなつのころたよりのふみをまいらせんな（2ウ）つのころしもすきゆかはうき世はふちやう
 のならひにてみちのくさはの露しもともきえぬるよとおほしめし後世^{ごせ}をはとふてたひ給へいとま申てさらとてちたひ
 かすゝき殿くまのそたちの人なれは山ふしすかたにさまをかへをいとつてかたにかけものうきたけのつへをつきその
 ふし／＼によをこめてふししろをたち出ゝは（3才）やこゝのへにつきにけりひとめしのふのたひなれはいつしか花
 のみやこをはかすみとゝもにまきれ出あらしな山とをりすきほつくみちのうきなんしよをくたらせ給ひけるほと
 に人かやとをかすゝれはやふれたとうといわのほらかみすみあらすやしろをはやとなきまゝのやとゝしてくたらせ給

ひけるほとに七十五にちと申には（3ウ）をうしうはころも川たかたちの御しよにつき給ふすゝきなにとかおもひけんをいすゝかけをはかたはらにとりかくしうちかけとつてきるままに十五ふかけたるあみかさふか／＼とひつこうてたちわきはさみたかたちとのゝ御うちをここやかしこを見申にふしきやなきしうふちしろにてうけ給をよひしはひはんとうはんそ（4オ）せう人さなからみちにみち／＼てもんくわひにこまのたてともなきやうにうけ給をよひしになとしてひそかにましますらんとおもひものからいしきにこしをかけ御うちのていをきゝいたりあらいたはしやたたか殿の御しよにはかたきむかふときこしめしさふらひたちをめさるゝにいつもかわらぬへんけいをさきと（4ウ）してさふらひ八人御まへにかしこまるほうくわん御らんしていかにかた／＼よしつねかくひをとつてくわんとうへのほせこうさんをも申くんこうのしやうにあつからはほうこうのちうにはこせをとへいかに／＼とのたまへはむさしほうへんけいはあささらわらつたはかりなりそのほかにとつてもかたおか八郎とかめひの六郎とめとめをきつ（5オ）と見あわせこはくちをしき御ちやうかなたれあつて此中に君の御くひを給くわんとうへのほせこうさんをは申へきこれに有あふ人々はみな御ともにこそおほすらんさはありなから此中におちんと思ふ人あらはひらにいとまを申てをちよたれもうらみはのこるましとさしきをきつと見たしければよしだけひろつ（5ウ）な一とうにすゝしく申されたる物かなたれもかやうに申たき御返事にて候そやおもふにかたきあかつきよすへしあふてからめて二てにわけんことあらしみかたはふせい成とも両ちにむ（ら）かつていくさは花をちらすへしまたほのくらきそうちうにあればおふてこれはからめてなんとゝてこゑをはきくともすかたはみ（6オ）しわれも人も心しつかに有とときにかみへ申て御しゆ給さいこのなこりおしむへしもつとしかるへしとてしゆくくのたいへい大つゝをとりいたしきみも御出まし／＼て女はうたちの御しやくにてかみにさかつきあかりければしもは以上八人三こんのさけすくれはのちはたかひに（入）みたれおもひとり思ひさしちしやくちもりのらく（6ウ）あそひまふつうたふつのむほとにかめいかのふ

たるさかつきをむさし殿におもひさしたつてまいをそまいにけるほうらひさんには千とせふるまつのゑたにはつるす
 くういわをのかたにはかめあそふしほりみかへし^{みつかし}かも入くひしきのはかへしといふきよくをもみにもふてさつとま
 ひてたちまわるところにもんくわひをみてあれはたち（7才）わきはさんたおのこのあみかさまふかにひつこうたる
 かからいしきにこしをかけかめいかまいをきゝいたりかめいの六郎あれはたれなるらんとおもひけれども中々思ひよ
 らさる事なれはまひすてにまいをさめしやくにてかけていたりけるやゝ有てかとのおのこのこゑとして大きなこわ
 ねをさしあけなふ／＼御う（7ウ）ちにあんなひ申さんとたからかによはわるさしきの人々なりをしつめてことのし
 さいをきくところにむさしほうへんけい此こゑをきくよりもこれはかたきのやつはらかあんないけんみのそのために
 いつわりまなんてきたりたりせひともけふのつかひをはあますましといふまゝにはかまのそはをたか／＼とつてなき
 なたおつとりいてんと（8才）すかめいの六郎もつゝゐてさしきをつんとたつてむさしかたもとをひきとゝめのふし
 つまり給へむさし殿ふしきやな此こゑをきいたるやうにおもふとてむさしをとゝめてかめいはしり出てみてあれはし
 やきやうすゝきの三郎殿たひやつれにおもやせて一人こゝにたち給ふかめい夢ともわきまへする／＼とはしりより
 すゝきが（8ウ）たもとにとりつけはあにはおとゝにとりつゐてさていかに／＼とはかりなりはるかにありてすゝき
 殿なに事あるかめいなみたををしゝめその事にて候そや君の御うんもわれらかうんもいま此ときにつきはてゝあ
 すをかきりとはやなりぬそれをいかにと申にひてひらうき世にあるほとはきみをもたつとみ申せしかういむちやうの
 （9才）ならひとてひてひらこそのふゆはかなくならせ給ふなりその子ともわかきみに心かわりをつかまつりかまく
 らよりのけんみにはなかさきの四郎殿を申下し給ひつゝさて国のたいしやうにはてるいいたて^{（たて）}かむかひつゝ大田山く
 ち中むらにちんとつてあるときいて候とても御身かほとおほしめしたつならは^{（二）}五ねんも三年もさきに御くたりまし
 （9ウ）／＼て一たんらくをなし給ひおもひ出とおほしめすへきになんそつめたる御うんな明日の御か（つ）せん

に今日くたり給ふ事よろこひの中のなけき也こんちやうにて見へ申こそなによりもつてうれしう候へうき世のもう
しうはれてありかみにもしろしめさるましとかめあやしむ人あらしをちこち人のふせいして御かへりあれやすき殿
(10才) すきこのよしきくよりもふかくなりかめいりやうもんけんちやうのつちにほねをはうつめとも名をはう
つましふかくさよしていしう／＼ふしふうふ三世のきえんなふしてはいかてか今日まいるへきすきか参て候とかみ
に申せかめいとてわらちふみぬきうへにきたるうちかけとつてふわとすておと□つれてほうくわんの御まへにこそ
(10ウ) 参けるほうくわん御らんしてめつらしやすきしやくやくに世がわづいんくわかきりのとうりによつてへ
いけにきせしそのつみのきけい一人の身にかわりあすをかきりとはや成ぬされはすへの露もとのしつくとなるふせい
一しやうたもんのかたきにうけかくなりぬるとおもひなは人をも世をもとむましこれにありあふ人々(11才)も
をとしたくはおもへともかたきゆるさねはちからなしわとのは見しれる人もあるましとふ／＼くまのへかへり候へみ
し物とおもひなはほうこうのちうにはこそせをとへいかに／＼と有ければすきこのよしうけ給こはくちをしき御ちや
うかなきみにおかせるとなふして御はらめされ候はんせんこいかと思ひけんなんそや又すきめか月日こそ
(11ウ) おほきに今日参あふ事も三世のきえんくちせぬゆへなりいくささんしてまかりくたりさもあれ君の御さい
こところはいつくなるらんと思ひやり申たるはかりにてもんのからいしきにこしをかけすきめ一人すこ／＼とはら
きりなはんほうむねんに候へきせひ御くそく一両給つて明日の御かつせんにうちにつかまつらんと申きつてをち
ん(12才) するけしきはなかりけりほうくわん御らんして此うへはちからをよはすとて御さをたせ給いてこさく
らをとしのよろいを一両とりいたし給ひかにきくかすきとの此よろいと申はしのふのさとうせんもんか子ともの
もうけのそのためにくそくを二りやうおとしたてあひまつ所にかれらきやうたひうたれぬめんほくなければよしつね
さ(12ウ) とうかたちへよつてかれらかさいこのていをかたつてきかせ候へは母のにこうはなけかすしてかかるい

ゑのめむほくや候御とも申てのほりしよりこのかた帰らん事はふしきそとおもひもうけて候そやまちてかいなき此か
 たみ又みんなのとはかなさよ誰によろいとすへきわか君にまいらせんとこさくらおとしをよしつねにうの花をと
 しをむさし殿（13才）にゑさせたるくそくなりひとつはかれらかかたみといひ又はさねよきものゝくなれはしせん
 の事のあらんときよしつねちやくせんそのためにこれまでもたせて侍れとも御へんにこれをとらするとてをなしけの
 三まいかふとにうちものそへてすゝきかまへにとうとをいてたひやつれにさこそあるらめはやそこたまわれすゝき殿
 すゝ（13ウ）きめんほくほとこして御代か御よの御ときせんりやうまん両給つたるよりいま此よろいにしかしとて
 かわらけとりあげ三はいくんだるすゝき殿のしよそんをはほめぬ人こそなかりけりさいとうのむさしは大なるなみた
 をはらゝとなかしいこくはみねはそはしらすほんちやうにをいてわか君の御うちのやうにそろふたることはよもあ
 ら（14才）しゆへをいかにと申に一とせいせとするかきやうかまくらにてのうちしにつきのふたゝのふかしにさま
 いま又すゝきか七十五日まかりくたりきみよりきせなか給うちしにつかまつらんとよろこぶ事よかほとまてよきわう
 とうを御もちあるわか君の御くわほうのほとをつたなさよせめて大こく四五かこくを御ちきやうなき事こそ（14ウ）
 くちをしけれ夜もはやふけぬらのめやうたへやもつともとてうたふつまふつさかもりするすてにその夜もやはんは
 かりのことなるにすゝきの三郎しけ家はいたる所をつんとたち中ものろふに出ておとゝのかめいをちかつていか
 にやかめいよくきけほうはいたちもきゝ給へこんとしけ家ふちしろを出し時ちう代につたわれるは（15才）らまき
 を一両きてくたるそも此はらまきと申はゆやこんけんのいにしへまたこくのあるしにてふわうの中のおわうにて天
 下をおさめたまへはかいたひことにしつかなりしかれとも御かと御代をつかせ給ふへき大子一人もましまさすいかな
 らんきさきにかわうしのたんちやう有へきときさきのかすをそろふるにすてにはや千（15ウ）人いわひ申なりてう
 あひにおほしめされたるきさきにたにわうしのたんしやうあらされはましてやうときかたさまにいかてかさらにをは

すへきされともすへのきさきに五すいてんと申こそ御くわい人をわします御かとゑいらんなのめにてすてにはやよの
きさき御きしよくさらによからす五すいてんにうちそいてすてに一のきさきとしたい（16才）りへうつし申さんと
せんきまします折ふしす百人のきさきたちこれをねたみそねみて御門ましまさぬおりふしにこすいてんにみたれ入も
のゝふをかたらひきさきをかいたてまつりしん山ふかくすて給ふされともきとくふしきにやさしいもやふれそんせ
すころうやかんもふくさすしてまんする月にたんちやうあるしかもたいしにて（16ウ）おわします人すむ山にてあ
らされはぢんりんあたりにたちよらすいたわしや母のうみをふく^み給へはたちまちにじきとなりやかんのものをと
もとしてとし月をふるほとにあまのいわとの明暮てはや七さいに成給ふ御かと世をうき事におほしめしをんこくゑん
りのはとうまてたつね給へとましますすてにはやくらいをすへ（17才）りたまふおりふしたつとき人のましまし
てきよ所をたつめる折ふしにたいしを見つけたてまつりたりをへそうもんすしんかけいしやうふしきに思ひ山中に
わけ入てくわしくみたてまつるにかたちは五すいてんにしてそのおもかけはたかほすたいし御年七さいまで人を見な
れ給ねはしんかあたりへたちよるををちのかせ給ふ（17ウ）をちけん上人はしりよりたいしをいたきとり申ごすい
てんのしかいをは山中にひやうをつけこめたてまつりたいしをはうん^{雲上}しやうにうつしたてまつる御門ゑいらんまし／＼
てちけんひちりをめされてくわしくたつね給ふにひちりもいかで存へきしゆけせきしやうを心かけきよしよをたつめ
る折ふしにたいしを見つけ（18才）たてまつりてさうもん申候とありのまゝに申ける御かとゑいらんましましてお
うにこれる世にむまれてかいをたもつこうみんかかゝるうきめにあふ事もまるかとかにてあらずやかゝる国にすまひ
してゑきなき事とおほしめしまんりのひしやと申てこくうをかくるまに今のたひしもろともにてすてにのり給ひけ
る第一の（18ウ）しんかのうみの大しんしけたかおくみのちうしやうかねみつかれら二人御ともにてくるまの四方
にちやうしつゝひかしをさしてとひ給ふわかつて紀伊の国小室のこふりおとなし里にしてはまたゆやこんけんとなら

われ給ふしゆ^{じやう}上をさいとしたまへりこすいてんのわうしはにやくわうしにておわしますのうみの大しんはこもりの（19才）みやもけんせらるゝおくみの中将はひきやうやしやこれ也そのあとをしたひ申ちけん上人とひきたつてひちりのみやとけんせらるゝそのほかの神たちしたい／＼にきちやうしてしよしや明神五大わうしくわんしやう十五宮こんかふやしよしやをけんせらるゝもみな此ときの人々そやしかるにかめいよくきけしけ（19ウ）たかよりしけいゑまで十六代とおほゆるそしけたかいにしへまた国よりわかつてうへとはせ給ひし折ふし御門ひやうちのそのために此はらまきをめされてとひ来り給ふなり代々ちやくしにつたわれるいゑのちう代今此鈴木までそうてんするなれは此たひも身をはなさすきてくたるおくかたのやつはらにとられてつゐにたもん（20才）のたからとなさんをしさよそれとてもちからなししけ家はめんほくに君よりきせなか給ぬ此ほとのかれにて二両かさねんことかたし御へんにこれをとらするとてからにしきおとしこかねさねのはらまきをぬめてかめいにとらせけるかめいはらまきひつたてゝこれ見たまへ人々六みやうきやうのその中に人のくわほうはきによつて二（20ウ）なんにむまれてもそうりやうをつくへしととかれたるはこゝなるへし此時いゑのちう代をかめいの六郎ゆつりゑてちすしのやさきにあたるともむないたにうけとめてしなんす事のうれしやとおとりあかつてよろこふたりあつはれふしのでほんやとほめぬ人こそなかりけりすてにその夜もあけかたの事なるにむさしほうへんけいいたる（21才）所をつんとたち四間ところへつと入いつもこのむかちんのひたゝれみつにほしのはいたてしみつひきりやうのゆこてさしいまたよろいはきさりけり二しやくはかりのうちかたな十もんしにさすまゝになしうちゑほしひつこうてしらあやたたんてはちまきにむすとしめ四しやく二寸のたちはいて人々御めん候へとて四間のていより（21ウ）ちうもんのろうに出かろうとにこしをかけひかしむきにそいたりけるすゝきの三郎しけいゑもきよりうしますのひたゝれ君よりくたし給つたるこ桜おとしのよろいをちやくし三尺五寸しやくとりつくりのたちはひて卅六さいたるおうなるくろのそやおふて三人はりのまん

中みきりこれも四間のていより中もんのろうに出かろうとにこしをかけひ（22才）かしむきにそいたりけりわしのをかたおかくまい太郎けん八ひやうへひろつなひせんのへい四郎けんのよろいかふとのををしめたちはきめとくきつとみあわせたり此人々のあり様ははんくわひちやうりやうあんろくさんもおもてをそはめはちぬへしその中にとつてもかめいの六郎しけ家はひときはすくれてかたつたりはたにはからくれ（22ウ）なひをひつちかへせいかうのはつたるによせかきめゆいのひたれにくりをゆつてしめたりけるやうはいとうりのさうのこてひやくたんみかきのすねあてにくまのかわのもみたひしろかねわたしあくつたかにふんこうてはひたりけりしにぼたんのはいたてからにしきをとしかねさねのはらまきからいとおとしのよろいのみときとかやく（23才）を三両かさねてさつくとときをとりあかりたかひほかけゆつてうわをひちやうとしめ九寸五分のよろいとをしめてのわきにさいたりけりしやく八すうちかたな十もんしにさすまに三しやく八すんあをへつくりのたちをはき四十二さいたるたかうすひやうはつたかにとつてつけおなしけの五まいかふとにくわかたうつていくひにきしろあやのほろを（23ウ）さつとかけぬりこめの四人はりにせきのしめつるよつてかけまん中みきりよこたへてよまのていよりちうもんにゆるき出たるありさまはものによくくたとふるにめいほく大しはくたわう我てうにてはまさかとすみともよし野山にてなをあけしあふしうのたふもこれほとこそありつらめきりやうによせて出たつたりとこゑを（24才）そろへてほめたりけりすてにその夜もあけられはをくかたのくんひやうつたつたるよしこそきこへけれまつをうてはときのしつけんなかさき殿を大しやうにて（三千八百よき）ひかしのもんへをしよするからめてはをたとりのみ二千五百よきにしのもんへをしよする御しよの御てはおうてはすすきやうたいかねふさた三きにてかためた（24ウ）りからめてはわしのをかたおかくまい太郎けん八ひやうへ弓ろつない上五きにてかためたりむさしほうへんけいはうきむしやになつてよわきところへすけんとしておうてのやくらへはしりあかりかろうとにこしをかけひかしむきにいたりけりか

めいの六郎しけきよをなしやくらにかふとをぬいてとうとをきゆみとりなをしつるくいしめらす（25才）ひきして
 こそいたりけりあにのすゝきをとゝのかめいかすかたをきつとみてなふ御へんはやくらへあかりたるよなかめいきひ
 てさん候此ちやうはひらちやうはひらちなれともひさしくこしらへすたるちやうにてほりひらふしてそこふかし
 いかにかたきかつめかけてうめくさこむとも三へのほりをはよもいつときにはうめししけきよしけいへときやうたい
 （25ウ）なのつてをくかたのやつはらにてなみのほとをみせうするそすゝきいてよくいふたりかめいしけいへはな
 かたひはらまきにかたひかせやつほおほえねともさらはいて見んかめいとてをなしやくらへあかりけりかくてよせて
 の人々はをうてからめてもみあわせ一にときをとつとあくる六しゆしんとうかくやらん天地もひらきておひたゝし
 ちやうには以（26才）上九人の人々いくさのほうとてやさしくもときをとつと合けり物によく／＼たとふるにいか
 つちわたる春の野にふるすを出たうくいすのはつねをつくることくなり時のこゑしつまりければてるいの太郎たかな
 を一ちにこまかけよせいに御しよかたの御ちんへ申へき事候昨日まではほうくわん殿をしゆくんとあをき申とい
 へともかまく（26ウ）らとのゝきよひにそむきおわしますによりなかさき殿大将にて御下かうのそのうへあめのし
 たにすみなからいわい申におよはすきけいの御ちかいましまさはいしやく申せとの御つかひにたかなを参て候と申
 させ給へ人々とてゆんつへにすかつてひかへたりむさしほうへんけいはやくらのあゆみのいたをかふれよとふみなら
 しなに（27才）かういふはてるひめかゆふきこつからゆゝしうてよきむまにのつたれはひてひらか子ものなかに
 はとれなるらんと思ひしにまたらうとうのてるひめかなんそや此もんくわひまで参きてむまのうへにてなのるやうら
 うせきなりそのちんひいてのけとそ申けるてるひの太郎これをきゝかくの給ふはむさし殿かこめつらしきさ（27
 ウ）うこんな君代ふかくたつとめはしんをうやもうたをりありかまくら殿の御きやうしよ給まかりむかつたたかな
 をにてわ人ともをはしんちつにものゝかすとは思はぬなりむよふのかうけん申さんよりさふらひはわたりものそかふ

とをぬいてゆみつるはつし命をつけとそ申けるさしもかふなるへんけいもことはすくなにてたつたりけりかめいの六郎（28才）しけきよはむさしかあたりへたちよりてなふむさし殿なにを仰候そしんめいをもたつとますふめいをもおそれすしてほうにまかせてふるまひ候ほうしやくふちんのやつめになにをおほせ候ともたゞけんをきうすににたるへしむやうのろんをとゝめ給へきみこそ御はらめさるゝとも我らかくて候へはいくさは花をちらすへしかふ申つわ物をいか成（28ウ）ものと思ふらんゆやこんけんの一のしんかにのうみの大しんしたかよりは十六代のこうあんすゝきのしやうしか二なんかめいの六郎しけきよ年つもつて廿六てるひ殿にや一すしたてまつらんにうけてみよといひもあへす四人はりに十四そくとつてからりとうちつかひもとはつうらはつひとつになれときり／＼と引しほりまちをこ（29才）ふしにひつかけてゑいやつとかつてうつたるはおふとうつきなんとのことくなり一ちんにすゝんたるてるひかしやていにたかのゝ四郎かこまひきそはめてひかへたるよろいの袖三のいためてのはひたておくりのいたきものたはねをするりとをしあいひきかけてうらをかけてくつとぬけてあまるやかてるひか馬のふとはらにはふくらせめてつんはと（29ウ）たつたかのはいたて成ければうけもあへすめてかへしにしころをつゐてとふとをつればてるひかむまはいたてをおひひやうふをかへすことくにたかひさおつてひつたとかへすてるひもむまよりおりたつたりぢやうにはむさしすゝきをさきとしていたりや／＼とゆりあけ／＼わらひけりよせてはわらはれてこゑもせすいこくのきんくわかゆみの心も（30才）これほとこそありつらんとよせてもしたをまきにけりあにのすゝきおとゝのかめいやすかたを見あけてつく／＼とみてあふいたりやかめい此五六ねんはなれ御へんいかほとにおいたつて有らんと心もとなく思ひはる／＼くたり見てあれはゆうきこつからよりもすぐれたるなかやつかのおほゆみはよもふしきにおもひしにをしてかつ手の（30ウ）さたまりていたりやかめいあいたりやかめいとのとゝ今のきしよくを紀の国にとゝめおく一そくともにみせはやなきみも御出まし／＼て御けんふつあれかししけ家もや一すしいて見せ申さんといふまゝに

三人はりのなかさしぬいてあふらひきやさまひろ／＼とひらかせていかによせてのくんひやういまのかめいかあにのすゝきのしやうしと（31才）はわか事なり四国九国のたゝかいにはとゝのこうみやうなをあけし御代しつまつてきしうふちしろはほんりやうなれはあんとを給しよりやうにくたりきけいのみやこ下かうをは夢にもしらすして御とも申さすさは有なから此五六ねんきしうふししろにありとは申せとも君の御ことかめいかゆくえ一かたならぬによつてきしうふちしろを（31ウ）出いそくとすれとかちし日数つもりて昨日まで七

十五にちに夕部つき今日の御かつせんにあふたるはなむほうくわほうのものそのいまのかめいかやほとなくともうけてみよとそいひたりけるよせての人々たてのいたをつきかさしすゝきかいるやをまちいたり鈴木此よし見るよりも三人はりにからりとつかひかなくりはなしにかつきとはなす一ちに（32才）すすんたるてるいかいとこにまるたのとうしかたかのかとうのや一すしとすゝんたるむないたにたつよりはやくくつとぬけあまるやかうらにひかへたるむきのゝ四郎かくひのほねにひしとたつ二きのむしやはためすしてゆんでめ手へとう／＼とおちにけりつくくんひやうこれを見てかれらきやうたいか矢さきにはくろかねのたてをついたりともかなふへし（32ウ）とは覚えすやあ此ちんひけといふまゝにむら／＼はつとそひいたりすゝききやうたい此よしをみるよりもやくらよりもこふしにこのみよきむしやをかいゑり／＼さしつめひきつめさん／＼にいたりけり矢たねつくれはやくらよりゆらりととんでおりこまひきよせうちのりころも川の中のを水にかもめの一むすひなまをつたふふせいにて鑑の（33才）はなにてなみをたゝかせさんさめかいてそわたしけるおくかたのくんひやう此よし見るよりもすゝききやうたいとりにせよたちもかたなも入へきかとおちかさなつてひしめきけり鈴木きやうたいこのよしみるよりもたまになれたるほうらの鳥のふせひもかくやらんおとろくけしきはなかりけり大せいの中へわつて入にしからひかした（33ウ）よりみなみくもてかくなわ十もんし八はなかたといふものにさん／＼にきつたりけりすゝきの三らうしけいへ十三ききつ

とおとせはかめいかてにかけ廿七きなきふするけにやかたきかこらゑはこそ風に木葉のちることくむら／＼はつとの
いたりけり此人々は手もおおす川しつ／＼とわたしもときいきおひかかつてひかへたるはい国のはんくわいちやう
(34才) りやうもかくやと思ひしられたりむさしほうへんけいはやくらのうへよりつく／＼とみてあらおもしろと
すゝききやうたいかかつせんしたるやうやそうしてあのかた／＼は天下の御用所のいくさをしならひたる人にてかた
きのいろをさとりてかけひひたることのおもしろさよしはらくそれにて御まちあれてたつてこんといふまゝにさきの
なしう(34ウ) ちゑほしにてしらえのなきなうちかたけおふてのやくらにはしりあかつてひかしむきにそたちた
りけりそも／＼ころはいつなるらんふんし五ねんうるう四月廿八日のいまたみのこはかりなるにてつたる朝
日に物ゝくのかなものは折から色やまさるらんひらいたあふきはくれないゐにて日とさしむかつてたつたりけるむさし
ほうか(35才) ありさまはひしやもん四天わうのあれたるけしきもかくやらん大をんあけてよはわりけるいかにお
くかたのくんひやうなりをしつめてことのしさいをたしかにきけそれ人けんの命はてんくわうてうろうつもうたるゝ
も夢のたわふれ昨日まではかたをならへひさをくみしめん／＼かけふはかたきとなる事もいんくわれきせんのとおり
なるによつて世を(35ウ) も人をもうらむましさりなからなんちらかゑん国にすんで入とりかうたうしこゝかしこ
にてそらいんしてぬすんでうつたらんするにはにまいしそけふのむさしかするいくさこそ手ほんよみならへそれかし
かきりのこしたらんともからは見し物と思ひて後世をはとうてたひ給へまつ代の物語にへんけいかまいをいはんまお
ふそやはやしてたへやかた／＼すゝき兄(36才) 弟もかねてよういやしたりけんつゝみたいをとりにいたしたゝき
あけてそはやしけるちたひむさしはなんとにてもらつふゑんねんのちやうすまひはひとてなろうたりなきなたのゑを
とふ／＼とうつてちやうしをとりかうてたつたりしかかすみにかすんたおほきなるこゑをはつたとあけて一せいをこ
そまつたりうれしやとふ／＼となるはたきの水目はてるとも(36ウ) いつもたへせしおもしろや花をなかなすはよし

野河いかたをなかすはおほい川もみちをなかすはたつた川みやこあたりにめいしよはさま／＼おほけれども遠国なからめい所かなきり山たかねののこりの雪きえたにのつらゝもとゝけぬれは衣川の水かさまさつてへんけいか長刀にておくかたのくんひやうともみなとをさいてきりなかつともみへほしといふきよく一ひやう（37才）しはらりとふんでひらひたあふきをやくらよりころも川へさつとなけ入あふきの出つるよりなをはやくやくらをゆらりととんでおり三のへいたちしらあしけの七き八分あけ六さいひきよせゆらりとのりたりけりわしのをかたおかかさきにかゝけんとすゝんたるへんけいこれをみていて／＼むさしあきりせんあとをこなせわかむしやととてさきかけ（37ウ）してこそわたしけれむかふはしのふよししたけひまるたをさきとしてをくには我とおほしきむしや三百きはかりにてひかへたるちんの中へむさしこまをさつとかけ入たりおくかたのくんひやうはちんを二つにわけたりけりされともこゝにたけ日の太郎となつてむさし殿にわたりをふへんけいこれを見てもつてひらひてちやうとうつかふとのゆん手のふきかへしお（38才）もてのほうさきめてのかむりのいたをかけてすんときりてをとしけるはなさき此よしをみるよりもあきつたりむさしとのそこをひくなくといふまゝにすき間なくこそかゝりけりへんけいこれを見てもつてひらいておかみうちになちやうとうつかふとのまつかうふたつにきりわつてうしろはしころほろつけまへははつむりよたれかねかなとうひつしきくさすり（38ウ）さつとうちわられゆんでめてへさはけたりしはたの四郎かこれを見てあきつたりやむさし殿そこをひくなくといふまゝにすきまもなくかかりけりへんけいこれを見てあうおくかたのくんひやうは心はかふにて有けるそしりそくふせひを見せさるはてなみのほとをみせんともつてひらひてちやうとうつしはたもきこふるめいちんにてかふりのいたにてうけなかしさら（39才）ぬていにてかけとをすこちん（こ）にすすんたるかめいの六郎これを見てむさしとのゝきりのこしうけとつたりやといふまゝにあをへつくり三しやく八寸するりとぬきよこてきりにかつしときるかめいかうてはつよかりけりたちのかねはよかりけん四まひかなとうをしそへ二十四さいたる

そやをかけしやこしのつかひをはくるまきりといふ物にすんときつておとしけるかみは（39ウ）ぬけてたうとをつれは下はくらにそのつたりけりこれをはしめて七きの人々入ちかひもみちかひさん／＼にきつてそまはりけるかゝる所にとさの八郎たかなをとかめひの六郎しけ家^{きよ}かむすとかんとてとうとをつるかめいふさうのかうの物かたきとくむならは大せいためておりあふへしとかねていろやさとりけんときをとつておさへてくひをふつつとかきおとした（40オ）ちあからんとするところをとさかめのとの十郎かすきをあらせすおりあひてかめいかゆんてのかいなをはみつもたまらすうちおとすかめひふさうのここの物心はたかさこや松のみとりとはゆれともいたてをおいぬれはたちをつえにつきいまをかきりと見ゆるしやきやうすゝきの三郎大せひの中にてたゝかいしかをと／＼かめひかたてをおひそめひかきりふちやうの有様（40ウ）をみてかたきを四方へおつちらし我身をきつとみてあればあさてふかてのきらひなく十三所手をあふたり今はかふと思ひかめいをかたにひつかけちやうのうちへつと入たかき所におろしをきやあそこにてはらきれかめひなむあみたふつともろともにすゝきはしやうねん三十三かめひの六郎廿六さしちかひてしんたるををしまぬものはなかりけりむさし（41オ）ほうへんけい君の御まへに参鈴木きやうたいこそはやうちしにつかまつりたるよしを申ほうくわんきこしめしかめひか事はいせんより思ひもうけたることむさんやすゝききの国よりはる／＼くたり世にもなきしうのかとうとしてうたれぬことのむさんさよけさよりよむ御きやうもほん^{ほう}のふのちふんとなるそふせいてたへやむさし殿へんけいいうけ給此たひ（41ウ）はなにかしかしにはんにあたりて候と申もあへすおていへつと入くろかねをあつさ五分にきたはせたるおけかわとうとなつてかたなたまりにきたりけりくろかはおとしのよろいうの花をとしのよろひ三まいかさねてさつくとちやくしよつてうはおひちやうとしめゑひらかたなくひかきかたな三こしまてこそさいたりけりなきなたこそりは（42オ）をくらのまへわにおしよせゆんてにくまてひつさけめてには大なきなたをゆりさけひさにてむまをのりたりけりへんけいかかけ出れはたゝ小山のうこ

くことく也大せひの中へわつて入ひさくちたかも、馬のはらはり／＼とひきやふれはしやうきたをしをすることくなり此いきおひにおそれてむちをうちてにくる所へへんけいこまをかけよせくまでをわ（42ウ）たしかふとのてへんにひつけてゑいといふて引よせてさけきりしてこそすてにけりいわんにやいまもろこしまてもそのなをゑたるへんけいかけふをさいことのかつせんにおもてをあわするものはなしいかれるまなこはこくうんのところ／＼のはれまよりあさひのうつるふことく也かたきをなひけておめくをとらはひてんいなつまはたゝかみししそうとらのほこれるこゑもかく（43オ）やと思ひしられたりへんけいか二とのかけにおくかたのくんひやうは百八十きうたれたりいはむかふかたきのあらされはあらものくさのいくさかな思ふつる事候とてこたかきところにこまかけあけてこまにいきをつかせけるかゝりける所にしのふの住人こ太郎とてしやうねん十八さいに成けるかへんけいかいせんのかけに父をうたせひまをうかゝひひとやいはやとねらひしかはやこゝにてみ（43ウ）つけ八そく矢つか二人はりつつてからりとうちつかひよつひいてひやうとはなしけるあらむさんやへんけいかのと／＼とひかへたるむないたにはつしとあたりこひやうのいる矢のかなしさはひそりけるそのやかうちかふとへからりと入てふへのくさりにひつしとたつもの／＼しいというまゝにかいなくつてみてあればとりのしたにてやいたりけん矢からはぬけてねはとまるさしもにかう（44オ）なるへんけいもしころをつめて馬より下へとうとおつるあらくちおしやさいとうのむさしとていまゝてはかたきにもをにかみのことくにいわれしかかほとほそやにあたりはかなくならんくちおしさよさりなからさいこにきやつめをきらすはよみしのさわりとなるへきなりいせんのことくに馬にのりあふならはおちてきやつめかちかつくまししよせんこゝにてそらしにしてちかつ（44ウ）かん所をきつてくれはやと思ひそはなるかふとをひつかけてそらしにしてこそいたりけるしのふ此よし見るよりもあれ／＼御らん候へ人々のをに神のやうにの給ひしさいとうのへんけいを我らか手にかけていをととして候くひとつて見せんといふまゝに三尺八寸のいかものつくりのうち物をするり

とぬひてうちかたけもみにもうてはしりけりへんけいしころのひまより見あけ（45才）てきつとみてあれはあつはれよいきりやうかなあつたらわかきものをへんけいか手にかけてうしなわんことのむさんさよたちのすんはのひたりけりきやつに一たちうたれてはあしかりなんとそんなすれはうしおきにかつはとおきろふせきのやつめにはてなみのほとを見せんとてそはなるなきなたをつとてをつめさなりとなひたりけりたかもゝきつておとされのけに（45ウ）かへるところをほそくひちうにうちをとしあけにそうたるなきなたゆんてのかたになけかけてこまひきよせてうちのり城の内へつつと入こまをかしこにのりはなし大なきなたにすかりたんしゝとたゝよひあらくるしやかねふさよ君はいづくにおはしますかねふさむさしか手をひききみの御まへいまいるほうくわん御らんしてあれはむさしかさん候こゑをきけはいにしへのむさ（46才）しすかたはたゝおにかみのことしうらやましやなへんけいはしやうをもちへすたちまちにあら人かみと成たるやそれへゝとありければうけ給と申ておちゑんにつつとあかりかふとをぬいてとふとをきよりの袖をかたしひていまをかきりと見ゆるかねふさをちかつてさいこにわか君をおかみ申へしかねふさわかきみをいたき申むさしか手にわたすへんけいわか君をいたき申おくれ（46ウ）のかみをかきなてあらいたはしやかめわりさかのとうけにて御さんあらせ給ふときへんけいか参おほゆをひかせ申せしかなんしは七才までものあやかりとうけ給若君の御くわほうをあやからせたまはゝはくふりともに御あやかり候へ御かいりきは御しんふほうくわんゆみはためともの御ゆんせい二そうをさとつてあくまの物ゝおそれんはたいらのちゝふにあやかり候へうちものめされものゝほ（47才）ねきつて人におちられたらんするは物ゝかすにはあらねともかく申むさしに御あやかり候へ命のなかくわたらせ給はんはみうらの大助百六つになりしにあやからせ給へと申せし事が夢となりいま十にもたらすして衣川の水のあはときえたまわんいたわしやとはらゝとなきければあらいたわしやわか君はなにのよしみをもしろしめされさりしかへんけひかあらけなき出たちにも（47ウ）おちたまはすむないたをくたりにあけのちし

をにそめかへしなかるゝちを御らんしていたいけしたる御手にてかきなてさせ給ひつゝひし／＼といったきつきわつと
 さはせ給ふにそ御まへの女ほうおすへの人かねふさもむさしもきへ入やうになきにけりほうくわん御らんしてへん
 けいかさいこにさけをのませようけ給と申まきへのちやうしにもみちのかわけとりそへて御まへにまいらせあくる
 ほう（48才）くわんとりあけさせ給ひめつらしからぬ事なれともこれは二世までのさかつきさすそはやたまわれへ
 んけいあまりのかたしけなさに三といたゝきたふ／＼と一つうけゆく／＼とはほしけれともあらなにもなやふふか
 きたる事なればちにましはりて此さけかむないたをくたりにさらり／＼となかれけりほうくわん御らんしてべむけ
 いかさいこもちかつくそねんふつすゝめよかねふさ（48ウ）うけ給つてねんふつをすゝめければおくかたのくんひ
 やう此よしをきくよりも城のうちにねん仏のこゑのきこふるはへんけいかはらきるかたいかう一のつわものゝはらき
 るやうをみるとわれさきに／＼とみたれ入ほうくわん御らんしてすわやかたきのいかつくにへんけひははらをきれ
 かねふさはふせきやいよ御きやうせんする間とて御さをたゝせ給へはへんけいかたきのよははるこゑをちからと
 （49才）してなきなたにすかり大庭にとんでおり又たんち／＼とたゝようほうくわん御らんしてまたきつて出るか
 むさしさん候と申ほうくわんとりあへさせたまはす 後の世も又のちの世もめくりあへそのむらさきのくものうへ
 まてへんけいうけ給御へん歌とおほしくてかくはかり 六道のちまたのすえにまでよ君をくれさきたつならひ有と
 も かやうにゑひしほりのふなは（49ウ）しかう／＼とわたりけりおくかたのくんひやう此よしをみるよりもあら
 おそろしや又へんけいかきつてかかるこゝをひけといふまゝにわれさきにとにけにけりころも川をさつとこしむかひ
 のはたにてひやうとうするつはもの十七八ききりふせこなたのはゝたへかへらんとしたりしかしたひにしやうねみた
 るれはにしむきにつつたちなきなたまさこにゆりたてゝくわうみやう（50才）しんこんとなへつゝしやうねん
 四十八にして衣川のたちおふちやうをきせん上下をしなへてをしまぬ物はなかりけりおくかたのくんひやう此よしを

見るよりもあらおそろしやへんけいかそらしにしていたることよとてちかくものこそなかりけりいさやとをめに
てとらんとてさしつめひきつめさん／＼にいたりけりもとよりしんたるへんけいにてその身をちつ（50ウ）ともい
たますぬまさきのしやうしか此よしを見るよりもおくひやうなるかた／＼かなたちしにしたるへんけいをつきたをせ
とよはわつたりおくかたのくんひやうこれをきゝ心へたりといふまゝに二十き卅き我も／＼とかけよせけれどもおそ
れてちかつくものはなしぬまさき此よしみるよりもさてもまいなき人々かないて／＼ぬまさきつかんとてこまはら／
＼とかけよせ（51才）ゆみのはつをとりをしゑいといふてつきければわれも／＼とつくほとにへんけいをまへゑ
かつはとつきふせたりもつたるなきなたはねければぬまさき此よし見るよりも又へんけいかそらしにしたると心へて
馬よりころひおちふかきふちにしつみあしたの露となつたりけりかのぬまさきをにくまぬ物こそなかりけれおく
たのくんひやうへんけいかう（51ウ）たれぬるよとよははるこゑはひまもなしほうくわんきこしめしかねふさをめ
されへんけいかうたるゝうへはきけいもはらをきるへしさあらんときはきたのかた二人のわかをもよきにかひしやく
つかまつれかねふさうけたまわつて御まへをまかりたちれん中に参りしやうねん四才にならせ給ふわか君にむかひ申
て御さいこなりと申されければ若きみ殿はきこしめし（52才）さいことはなにのことそと仰けるかねふさうけたま
わつてさん候御さいことはにしにむかわせ給ひてあみたのみやうかうをとなへさせ給へはこれより西方こくらくせか
ひと申てゆかしき御所の候に御参候むさしもさきへまいらるゝかねふさもやかて御ともと申されければあらいたはし
やわか君にしはいつくとたまいて御手をあわせ給ふところをこしのかたなをするりとぬき心もとを（52ウ）一か
たなとをし申せはいたわしやあつとはかりをさいこにて露ときへさせ給ひけりおとわかとのをもおなしことくになし
申御せん様にむかひ申御さいこなりと申けるあらいたはしやきたの御かたには御きやうあそはしたまひしかにむ
かわせ給ひてはやとく／＼との給ひしを見あけたてまつるにいつくにたちのたてともあらされは思ひきりたるかねふ

さもなくよりほかのことはな（53才）しかねふさあまりのかなしさにひとりことをそくときけるあわれわかきかた
 〱とともにうちしにをなすならはかほとにものはおもふましとはら〱とこそなきにけるみたひ此よしきこしめし
 はかなの物ゝいひことやはやとく〱との給へはかねふさうけ給よはき心を引かへてこしのかたなをするりとぬき御
 心もとを一かたなをし申せはいたわしや御手をあわせ天上天下ゆひかとくそんと（53ウ）したひをつかさとりつ
 ゐにはつちにかへすなりなむあみたふつとさいこにて御とし廿四才と申にはあしたの露ときえ給ふいたはししとも中
 〱に申はかりはなかりけりそのゝちかねふさ君の御まへに参みな〱御かいしやくつかまつりたると申けるほうく
 わんきこしめされていしうもつかまつりて有いて〱さらはよしつねもはらをきらんとのたまひてにしにむかわせ給
 ひて御き（54才）やうのゆうもんこと〱くあそはし給ひてこしのかたなをとりなをし心もとにさしたてゝはかま
 のきゝはへおしおろしなんほうきつたとおほせければかねふさうけ給すゝしくきらせ給ひけりしはらくまたせ給へと
 てひやうふしやうしに火をかけてんかいやすみとやきあけはら十もんしにかききつてさうをつかんでくり出しきけい
 の御くひはらの中へおし入申みやう（54ウ）くわの中へとんで入おなしけふりとなつたりけるかのかねふさかふる
 まひはたゝ人間のわさにてなかりけりみやうくわしつまりければおくかたのくんひやうとも我も〱とみたれ入九人
 の人々のくひを給かまくらへのほせ申よりどもの御めにかくるいつれもやけくひなれはよしつねの御くひを見る人
 こそなかりけるしよ大みやうのその中にちゝふのしけたゝ御まへ（55才）をまかりたつていつれも御きやうたいに
 はみしるしるしの候とてよしつねの御くひとおほしきをかうかいをもつて御くち（の）うちをあけて見たてまつるに
 あんのことくむかふはそらせ給ひけるこれこそきけいの御くひと申又よくあけてみたまふにまき物一くわんぶくみ給
 ふしけたゝとりもあへす御まへにひさまつひてたからかにこそよふたりける きけいま（55ウ）つこにつつしん
 て申しやくもせいわのうてなをいてゝたゝのまんちうのいゑをつきしより此かたまゝちゝきよもりにせはめられ

はゝのくわい中にいたかれやまとの国うたのこほりにおもむきしより一日へんしもあんとの思ひをちうせす天下にお
こるへいけをはよしつね一人にあつけらるゝところにちよくせんの御つかひにゑらまれかゝたるかんせきにしゆんめ
にむち（56才）うつて木のねをまくらとしかたきのために命をします又有時はまんくたる大かひにふうはのな
むをしのき身をかい中にしつめんことをいたふすかはねをけいけいかあきとにかけ天下におこるへいけをは三とせ三
月にせめかたふけ大いとのふしをいけとり京かまくらにわたしけんしのくわいけひのちしよくをきよむ所にかちわら
一人のさんけんによつて（56ウ）はくたいのちうこうをむなしうしんのきやうていをわすかのさふらひ一人にお
ほしめしかへらるゝこともその身のふうむと存るかはたまたせん世のかういんをかんするにもたりあふきねかはく
はかちわらふしのくひをきつてきけいにたふけ給はゝこんちやう後しやうのうらみ有へからすはんたんおほしといへ
とも筆しにつくしかたし恐惶謹申よしつねはんとそよみあけ（57才）たりよりともきこしめし御きやうたいの御な
かとうりしこくに覚しめしさてもかはらさかのいこんによつてたはかるともひてひらうき世にあるならばかほと
のことは有ましきにいくほとなくてそのことも心かわりをつかまつり三代さうおんのしうのくひをきつたるやつはら
にいかなるをんをあたへべきとかきくとくよふにの給へとはふりをしらぬさふらひも見（57ウ）なかなるひをなか
しけるおくかたのくんひやう此よしをうけ給つてみなちりくに成たりけりかちはら此よしをみるよりもかなわしと
や思ひけん御まへをまかりたちくらおくひまもあらはこそはたかせにうちのつてみやこをさしてにけにけりかゝると
ころにうんのきわめのかなしさはするかの国の住人たかはしのよいちかまとをいさせていたりしそのまへをのりう
（58才）ちしてそとをりけるたかはしこれを見るよりも君のおほせはともかくもさふらひのまとのまへをむまにの
りてとをる事きつくわいなりといふまゝにもとよりはけたるまどやにてよつひきひやうとはなつゆんてのわきよりも
め手のわきへくつとぬけ五十七と申にはあしたの露とそきへにけるおなしくへいじをいけとりてするかのもりにてき

られけりちやく（58ウ）しのけんたもきられつへきにてありけれどもとのかふみやういたすゆへさらはなかせとの給ひてさいかいのはとうまてなかされけるとときこへけるくさのかけにてよしつねつゐにかたきをとり給ふ上下はんみんをしなへてかんせぬ人はなかりけり（59才）

〔注〕

（1）小林健二「固定前の幸若舞曲に関する一考察―大方家本「高館」をめぐる―」（『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲―』三弥井書店、二〇〇一年）。

（2）荒木繁「判官物の幸若舞曲と「義経記」（『語り物と近世の劇文学』桜楓社、一九九三年）。

（3）白石手簡「与安積澹泊書」^{あさかたんぱくにあたるしよ}の中で、次のように記されている（傍線は引用者による。通読の便を考慮し、私に句読点を付した）。

一 義経の事、東鑑に付て思召寄られ候御事、御尤の至奉_レ存候。是も近き世に仕候ものとは見えず候。高館草紙と申物には、義経より先に泉三郎は討たれ候と有_レ之候。東鑑には、遙に義経の事候ひし後に泉三郎はうたれ候よし見え候。是に付候ても愚存なきに非ず候。直ぐに行けば八町廻れば十六町とか候を弁慶を援兵に越され候とか草紙に候。今も高館より泉が城と申すへ其地□里と申事に候。是等を以考候にも義経は泉が城へ逃れられ泉三郎の事の後に発覚し候て軍も有_レ之候か。東鑑は実説たるべく候。又高館草紙には義経は自殺の後に家に火を放たれ候と見え候。焼首にて程を経候などいかにも慥ならぬ様の事、頼朝もそしらずにて氣遣なしに東伐と見え候か。（『新井白石全集』第五、国書刊行会）

（4）池田広司「幸若舞曲高館の校本研究」（『和光大学文学部紀要』一三、一九七九年三月）、小林健二「固定前の幸

若舞曲に関する一考察―大方家本「高館」をめぐる―」（『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲―』三弥井書店、二〇〇一年）。

- (5) 村上学「幸若舞曲原態への模索―「含状」「山中常盤」を手がかりとして」（吾郷寅之進編『幸若舞曲研究』一、三弥井書店、一九七九年）、小林健二「十七世紀初頭における幸若舞曲享受の―様相―梵舜の書写活動をめぐって―」（松尾葦江編『軍記物語講座 第四巻 乱世を語りつぐ』花鳥社、二〇二〇年）

The theme of the novel, however, is the enlightenment by *Ishiyama* Kannon, not the *chigo*.

This paper redefines the novel as a story based on the religion of *Ishiyama* Kannon and locates it in the context of other novels of the same background. During the 14th century when the novel was written, the religion practiced at *Ishiyama* temple was flourishing and it inspired a lot of novels, some of which demonstrate similarities with *Akino Yono Nagamonogatari*, such as *Utataneno-soushi* and *Hanihu-monogatari*. This shows that they have a shared background in authorship and readership, who, I argue, are the followers of *Ishiyama* Kannon.

Takadachiochi in the collection of National Institute of
Japanese Literature: Bibliographical notes and transcription
KUME Shiori

Takadachiochi housed in the National Institute of Japanese Literature is a peculiar manuscript, which consists of *kōwaka-mai Takadachi* and *Fukumijō* depicting the end of Minamoto no Yoshitsune. The only known manuscript with a same format has been the oldest copy in the Ōkata collection. The first half of text, namely *Takadachi*, is similar to the type of *Daigashiraryu*, one of the schools of *kōwaka-mai*, but there are some original sentences that cannot be found in other books. The type of text in the latter half is similar to the type of *Bunroku-books*, but here also exist some original texts at the end. As *Takadachiochi* in question has a documentary value in the sense that it could shed light on how *kōwaka-mai* was formed, the present paper introduces for the first time its transcription and bibliographical commentary.